

No. 886

白鳥の湖

—新潟—

白鳥の湖として知られる新潟県水原町の瓢湖。昭和25年、46羽の白鳥が初めて渡って来てから22年の歳月が過ぎました。今年は、2月の最盛期には1,000羽を越えるだろうといわれています。野生の動物は警戒心が強く、餌づけして保護することは非常に困難とされていただけに、見事餌づけに成功しからは、世界的にも珍しい貴重な湖として注目を集めています。

下駄一筋

—栃木—

格子戸のはまったひっそりしたたたずまいの家。奥からは、三味線や琴の音が聞こえてくる。踊りを舞う人の足に足袋が白く光る。玄関には、きれいに塗られた下駄がきちんと置かれている。和服とともに、長い歴史を歩んできた下駄。

「じれったい人ね。こんなの学校へはいていけないじゃないの。そっちよ。あーら、そっちだっていったらそっちよ」

おきぬのいうのは、ひより塗りの下駄だった。やっとそれをだしてそろえたら彼女は、口をきゅっと「へ」の字に曲げて……

山本有三の名作「路傍の石」の一節だ。彼の生地、栃木市を流れる巴波川べりの旧家のたたずまいは、かろやかな下駄の歯音を想い起こさせる。栃木市には、今も、名人肌の職人さんが下駄づくりにはげんでいる。

下駄づくり、一人前になるまで最低五年はかかるという。それだけに後を継ぐ若者もいないという。洋服と靴に押されて、年々減る需要。下駄づくりは今や、日本の伝統産業になろうとしている。

きれいに塗りあげられた下駄は、なんとなく、ふるさとを想い起こさせる。塗り師は高級な下駄づくりになくてはならない存在だ。

横尾さんは、この道に入って30年あまり。この道一筋に歩みつづけてきた。明日も知れぬ下駄産業の運命にもかかわらず、ただひたすらに、一塗り一塗り、精魂こめて塗りあげていく。そこに伝統に生きようとする日本人の心がある。